

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

ジャコモ・レオパルディとその時代 ④

* 初恋 *

國司 航佑

ジャコモ・レオパルディ(1798-1837)の代表作の一つに、「シルヴィアに *A Silvia*」という抒情詩がある。以下に掲げる「シルヴィアに」の冒頭部は、多くのイタリア人が暗唱できる程に有名である。

シルヴィアよ、今も覚えているか、
君が生きていたあの頃のことを。
笑みを湛えた移ろいがちな君の瞳に
美しさが広がっていたあの頃のことを。
そして、幸せそうに物思いに耽っていた君は、
青春の敷居を跨ごうとしていたのかい？

今は亡き恋人を歌った痛ましくも美しい言葉。この作品は、とりわけ若者のうちでよく読まれていると言われているが、それは彼らが失恋した自分をそこに投影するからであろうか。

シルヴィアにはモデルがいた。レオパルディの幼馴染テレーザ・ファットリーニがその人である。1818年、彼女は20歳にして肺結核でこの世を去った。レオパルディは、究極の形で体験した失恋を詩句に乗せたのである。

ところでこの作品をレオパルディが書いたのは、1828年彼が29歳のときである。つまり、恋が失われたその日から10年あまりが経った後に「シルヴィアに」が書かれたのである。それでは、10年の間、彼はこの女性のことを一途に考えていたのだろうか。いや、そうではない。レオパルディはむしろ大変多情な人間であった。彼が経験した多くの

恋愛のうち、成就したものは一つもない。だから、決してプレイボーイであったわけではない。が、相手に振り向いてもらえなくとも、レオパルディは人を愛することができた。そしてそれは、多くの美しい恋愛詩を作り出させた彼の「才能」の一つであったと言えるかもしれない。

そんなレオパルディにも、当然、初恋があった。それは1817年の冬(上述のテレーザ・ファットリーニが亡くなるたった一年前!)彼が19歳の頃の出来事である。レオパルディはそのことを詳細に記した「初恋の日記 *Diario del primo amore*」という小文を残している。1817年12月14日に書かれた最初の日記は以下の様に始まる。

美というものの大きな力を感じ始めた私は、一年以上前から、皆と同じように、美しい女性と言葉を交わしたいという欲望を抱き始めた。極めて稀に投げかけられる微笑みが、非常に不可解でありながら驚く程に甘美で喜ばしく感じられる——こうした美しい女性と。しかし、孤独を強要された私にあって、その欲望が満たされることはなかった。

非日常を感じさせてくれる綺麗なお姉さんにお近づきになりたい……19世紀初頭のイタリアにあっても、若者の思考回路は我々と似たようなものであったのだ(私は違う!と思われる方もいるかもしれませんが……。)先程、この日記を書いたと

きレオパルディは 19 歳であったと述べたが、初恋の年齢としては少々遅すぎる気もする。当時のイタリアにおいても、そのような感覚はあったのだろうか。何はともあれ 19 歳の冬、レオパルディは「美しい女性」と出会った。

だが先週の木曜日、一度も会ったことはないけれども、長らく会いたいと望んでいたペーザロ出身の女性が我が家を訪れた。私は、あの欲望にはけ口を与えてくれるのではないかと期待した。彼女は、どちらかと言えば遠い親戚にあたる 26 歳の女性で、50 過ぎの太った優しそうな夫に連れられていた。

レオパルディの初恋の相手は、7 歳年上の遠縁の女性であった。友人のお姉さんの大人の魅力に惹かれるといった話は現代の我が国でもよく耳にする。我々一般人の場合、そうした時に抱く得も言われぬ感情を「恋」と呼んで終わりにしてしまいがちだが、レオパルディは違う。言葉でそれを表現するのである。

彼女はそれまで見たこともない程、背が高く、しっかりとした体格をしていた。野卑とは正反対の顔立ち、強さと繊細さを兼ね備えた輪郭、程よい血色、漆黒の双眼、栗色の髪の毛……。

まずレオパルディは彼女の身体的な特徴を描いている。「背が高く、しっかりとした体格」、「漆黒の双眼」、「栗色の髪の毛」といった表現は美しい女性の特性を示しているものだろうが、筆者にはよく分からない。それに対して、彼女の挙動は明らかに「美しい女性」のそれとして描かれている。

彼女の挙動は慈愛に満ちていた。私には、優美な振舞い、わざとらしいところが全然なく、かえって自然な振舞いであるように思えた。これは、ローマ・ニャ地方の、とりわけペーザロの女性に特有の振舞いであろう。巧い表現が見当たらないが、マルケに住む女性とは決定的に異なる何かがあったのである。

彼女が醸し出す雰囲気、レオパルディは何かしら特別なものを見出しているようである。ペーザロは現在マルケ州とエミリア・ロマーニャ州の境に位置する小都市であり、レオパルディの住む（マルケ州の）レカナーティからそれ程遠いわけではない。だが、「野蛮な生まれ故郷 natio borgo selvaggio」の田舎臭さに対して、ペーザロは洗練された都会のイメージを体現する都市だったのだろう。それにしても筆者には大げさな表現に聞こえるが。



【ペーザロの街並み】

出典：<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9A%E3%83%BC%E3%82%B6%E3%83%AD>

その後女性は 3 日間レオパルディ家に滞在した。レオパルディは、最初は照れが勝って話かけることが出来なかったが、2 日目の晩カードゲームをした折に言葉を交わしその魅力のとりこになった。女性が去った翌日になっても、彼女の残像がレオパルディの脳裏から離れない。勉強をする気にもならず、食欲も出ない。元祖ガリ勉君のレオパルディにとって、勉強が手に付かないとは異常事態である。上に紹介した抒情詩「シルヴィアに」にも「僕は、時折、愉しい勉強と汗のしみ込んだ紙とを忘れて」という有名な詩句があるが、これもまたレオパルディが恋に落ちたことを示していた。しかし、19 歳のレオパルディは恋がどういふものかまだ知らない。そこで次のように自問自答するのだ。

これは恋だろうか。私は知らない。だがもしそうだとしたら、そうしたことを考えるようになる年齢になってから、今初めて恋の感情を覚えたことになる。19 歳と 6 カ月、私は恋に落ちたのだ。分かってしまった。恋とはとても苦しいものに違いない。

そして私は、残念ながらこれからずっと恋の奴隷であり続けるだろう。

一回り年上の異性の大人の魅力に惹かれ、これまで感じたことのない複雑な感情を抱く。そして、その体験を誰にも見せないように日記にしたためる。ここまで、レオパルディの「初恋」は我々日本人が体験するものと大きく離れるものではないだろう。しかしここから、詩人としてのレオパルディが顔を出すのである。

途切れ途切れのおかしな夢を見て 2 日目の夜を過ごした後、昨日、同じ感情が思ったよりはるかに強く——前日とほとんど変わらないほど強く——続いていた。そこで私は、夜を徹して詩句を書き始め、昨日一日中その詩を作り続けた。今朝になって、ベッドの上でその詩は完成したのである。

たった2日程度恋に悩まされたくらいで詩を書く気になるのは、我々の感覚からは遠いことのようにも思える。ひょっとすると詩を書くために恋に落ちたのではないか。私はそんな疑いさえ抱いてしまった。ただレオパルディは、自分は詩を書いたが、他人の恋愛に関する文学作品は敢えて遠ざけたらしい。生涯彼の抒情詩のモデルであり続けたペトラルカの詩も、この時ばかりは読む気にならなかったというのである。

さて、どんな強い感情も押し寄せる時間の波には勝てないものであるが、レオパルディの初恋はあまりに早く過ぎ去った。12月19日には、「一昨日の晩、私の愛しい苦しみが本当に過ぎ去ろうとしているように思われた。昨日の朝も同様である」と述べ、12月21日には「一昨晩から昨日にかけて、時間が情熱を大きく上回った。情熱はもはや本当に失われてしまって、読書に対する拒否反応ももう覚えなくなっていた」とまで言う。レオパルディが「ペーザロの女性」に出会ったのは12月11日のことだったから、「初恋」はたった10日しか続かなかったことになる。我々凡人であつたらすぐに忘れてしまいそうな経験であるが、レオパルディは尋常ならざる感受性を以って苦悶し、それを詩に表したのだ。

さて、「初恋」に関する件の詩が世間の目に触れるのは1826年のことである。『詩句集』(*Versi*)に収録された「第一エレジー」は、「初恋」の際に書かれた詩が原型になっていると言われている。

愛という戦いを初めて感じた日のことが思い出される。

その時私は言ったのだった。

「ああ、これが愛なのだとすれば、

愛とはなんと苦しいものなのだろうか」

「思い出される」と言っているのだから、これは当然1817年当時に書いた詩そのものではないはずである。とはいえ、冒頭の心のセリフ「ああ、これが愛なのだとすれば……」は、上に引用した「これは恋だろうか……」という文章を韻文の形にしたものと言ってよいだろう。

「第一エレジー」は、その後「初恋」という題を得て詩集『カンティ』に再録される。レオパルディは、10日足らずの心の迷い(?)を作品化し、その経験と共に生き続けることを選んだのであった。しかしながら、過ぎ去った恋の記憶を持ち続けるのは、一男性としては非常に大変なことではなかろうか。恋愛に敏感であることは詩人としての才能であるが、才能に恵まれすぎると困りものである。

<参考文献>

Giacomo Leopardi, *Canti*, Milano, Garzanti, 1999.
Giacomo Leopardi, *Lettere*, Milano, Mondadori, 2015.
Pietro Citati, *Leopardi*, Milano, Mondadori, 2016.
Adriano Bon, *Invito alla lettura di Leopardi*, 1985, Milano, Mursia.

(京都外国語大学講師)

早過ぎる死を悼んで(2)

天野 恵

前号でその前半部分だけをご紹介した『イタリーアーナ』誌のコラム記事には署名がなかった。何を意味するのか不明の(桃)という一文字が末尾に置かれていただけである。それでも私にはこの記事の執筆者が山本啓二氏であることがすぐに分かった。彼がマルタ語の研究をしていることを知っていたからである。マルタ語というのは、イタリア語とアラビア語といういわば水と油とも言える二つの言語が混じり合った、かなり特殊な言語なのだそうである。もともと早稲田大学の言語学科出身であった山本氏は、その当時イタリア会館でアルバイトをしながら言語学の研究をしており、このマルタ語を専門分野としていた。

ともあれ、まずは記事の後半をお読みいただきたい。彼の人となりがよく表れているのはこの部分だからである。

…拾う神

かつてのローマ・オリンピックの選手村は、今はユースホステルになっている。私はその夜、刑務所を思わせるその大部屋にいた。

二、三日してから何とかして金を作ろうと、街中で見つけた仕立屋に行って、例の服地を買ってくれるように頼んでみた。とても買えるような品でないことを見抜いた主人は、日曜日に開かれる市に行けば売れるかもしれないと教えてくれた。私はとにかく市の日が来るのを首を長くして待った。前の晩に調子の悪い電卓と使いかけのヘアトニックを同室の者に売りつけたことで勇気づいた私は、当日とにかく売れる物は全部持って行こうと思った。

市へ行って驚いたことは、その規模の大きさである。路のまん中でサクラを使って賭け事をして

いる男たちを何人も見たが、まるでフェリーニの映画を観ているような気がした。メイン通りにはとても店を開くスペースがないので、適当なところでわき路に入った。ジーンズを売っている兄ちゃんにここでやってもいいかと聞いて、さっそく紙を敷いた。商品は、高級服地二本、日本製カセット・テープ三本、シンガポール航空製の三色ボールペン二本、いちおう値段をつけようと思って、紙を小さく切ってそれらに付けてみた。市を訪れたり、そこで買い物をしたことのある観光客はたくさんいても、店を開いたことのある者はまずいないだろう、と考えると誇らしくもあり、また物悲しくもあった。なかなか客は来ない。そのうち隣のジーンズ屋の兄ちゃんがちょっと店番をしてくれと言ってどこかへ行ってしまったので、私はしかたなく二つの店をかけもちすることになった。やがて兄ちゃんに戻って来て、手に持っていたサンドイッチを半分にして私にくれたのである。慢性の飢えに苦しんでいた私には、それが過ぎた報酬に思えた。結局カセットは隣の兄ちゃんと向かいのじゅうたん屋のおじさんが買ってくれた。また服地は一本だけ、ある奇特定の青年が背広を作ると言って買っていった。私の客に共通して言えるのは、皆こちらの値段を無視して、自分で勝手に金を置いていったということだ。私は文句を言うより、正直言って現金が手に入った喜びを抑えることで精一杯だった。夕方になって、これでしばらくは食いつないでいけるなと思いつながら、夕立ちの中を濡れながら歩いて宿まで帰った。

今私は押入れの中にその時売れ残った服地を大切に保管している。今度イタリアへ行った時に、在庫整理するためである。(桃)

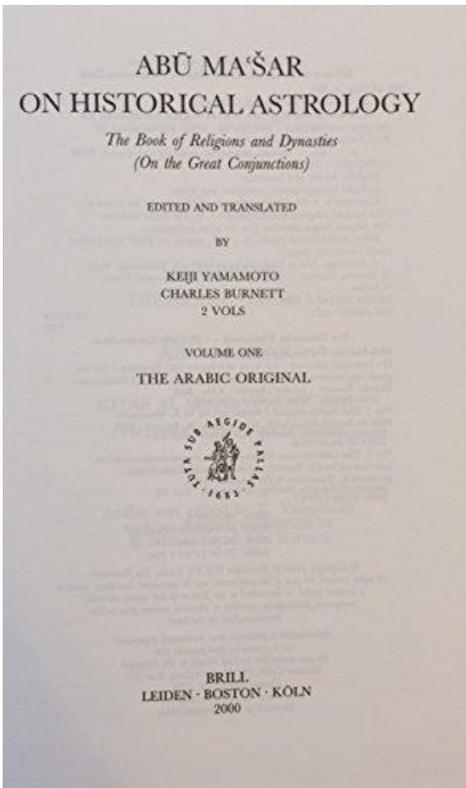
[イタリア会館誌『イタリーアーナ』第 15 号(1986 年 4 月) p.32]

今、このコラム記事を読み返してみても、やはりこれは名文だと思う。いや、文章そのものがよくできているというよりも、そこに山本啓二氏という人物のありようがあまりにも鮮明にくっきりと表現されていることに私は感動を覚える。カターニアを舞台とする前半部分においては、あるいは彼の

人の良さというか、悪く言えば騙され易さがむしろ印象に残ったかもしれない。

一方、今回ご紹介した後半部分からはどのような感想をお持ちになっただろうか。私が感じるのは、逆境にあっても他人に頼らずあくまでも自分の力で局面を開きしようとする強固な独立心と、そうした自分の陥っている逆境そのものを含めてすべてをあくまでも客観的に捉えようとする科学精神である。山本氏のこうした特質は別にこのコラム記事に書かれた事件に際してのみ発揮されたわけではない。それどころか、これらは彼の決して長くはなかった生涯を通して常にその生きざまを決定づけた根本部分をなしていた。

追悼記事と言え、故人の優れた業績を語るのが通常の形であろう。山本氏の場合もその研究業績は巨大なものであると推測されるのであるが、残念なことに私にはこれを語る資格も能力もない。何となれば、彼の専門とした分野についてあまりにも無知だからである。上のような推測が成り立つのは、彼の研究成果が世界的な評価を受けているからに他ならない。そのひとつがオランダの著名な学術出版社から2000年に出版された二巻本である。



これは中世末期のイタリアにおいてアルブ・マサールという名でもてはやされた9世紀ペルシアの占星術師アブー・マーシャルの著作のアラビア語原典の校訂版および対訳である。京都大学だけでも学内4ヶ所の図書館および研究所が所蔵している重要図書であり、国際的にも当該分野の基本的文献とされている。イスラム世界の占星術書と聞くとかなり特殊な書物であるかのような印象をお持ちになる方が少なくないと思うが、ヨーロッパにおいてこの本は中世末期からルネサンス期を通じて、近代天文学が急速な発展を開始する18世紀に至るまで何百年にもわたって政治や戦争から医学、農業技術、そして芸術等、およそあらゆる分野で非常に重要な役割を果たしたのである。



この夏、久しぶりに訪れたマントヴァで上の写真のようなルネサンス期の時計台を見て強く関心を引かれた次第であるが、これも中世に導入されたイスラム占星術の太い流れを感じさせるモニュメントのひとつであった。

15世紀後半、マントヴァ侯ルドヴィーコ・ゴンザーガの命により建設されたこの時計台は、単に現在時刻を知るためのものではなかった。複雑極まる構造を持つこの時計を製作したバルトロメオ・マンフレディという時計職人の残したマントヴァ侯宛ての書簡には次のように記されている。

「通常の時刻のほか、占星術師の時刻と諸惑星の時刻、日の長短、太陽が十二宮を通過する様子を表示し、また、月の動きを日一日、刻一刻、またその満ち欠けを上弦か下弦かを含めて地上から目に見えるがままに、月齢とともに表し、さらには何座とともに東から登り、何座とともに西に沈

むのか、そして正午および真夜中にどうなっているのかを、合、衝、スクエアを示します。これにより、危険な日を認識し、瀉血、薬の服用、外科手術、そして衣服を裁ったり着用したり、また畑仕事や旅行といった事柄に適切な日を知ることができます。」

占星術の知識を欠く私には、この書簡に示されたすべての情報を時計の文字盤から読み取る術がないが、当時のヨーロッパで君主から農民に至るまで占星術が人々の生活全般を律していた様子が手にとるように分かる文面である。こうした占星術上の知識は、まさに山本氏の研究対象であったアラビア語の書物によって西洋に伝えられたのである。わが国では、一部の専門家を除くと現在に至るまでその重要性が十分に認識されているとは言えず、実際のところ山本氏の主要業績も多くはロンドン大学ワールブルク研究所の教授との共著であり、もっぱら海外での英語による出版である。

ともあれ、氏が世界に先駆けて挑戦していたのはこうした分野であった。世界に先駆けての研究であるから、対象となるのはもっぱら一次資料である中世のアラビア語写本ということになる。彼はそうした写本を求めてカイロへ、バグダッドへ、そしてインドへと探索の旅を続けた。大学に専任教員の職を得てからは科学研究費をはじめとする競争的資金を獲得する道も開けたが、彼の場合、それはもう 40 歳を越えてからであった。分野が分野であるだけになかなか安定した職に就くことができなかつたのである。それでも彼は学生時代から肉体労働を含む様々のアルバイトによって生活を維持しながら、私費を使って幾多の調査旅行を敢行した。

今回、初めて著者名を明示して再掲させていただくことができた 32 年前の『イタリアーナ』誌のコラム記事は、彼が未だ言語学者を志していた若い頃のものであるが、研究旅行のスタイルは晩年に至るまでまったく変わらなかった。病に倒れてからも研究意欲は衰えを見せず、入院中も近著の刊行の報せがライデンから届くのを心待ちにしていた姿が思い出される。そんな氏の訃報に接したのは、ちょうどマントヴァの時計台を眺めては

文字盤を読み解くのに難渋していた暑い日のことであった。

イタリア関係の和文図書の収集として全国屈指の規模を誇るイタリア会館資料室は、写本を求めて自らの足で世界の図書館をめぐり歩き、諸事情に精通していた山本啓二氏が指揮をとって整備してくれたものである。生前の氏と接触することのなかった方々も、資料室のご利用に当たっては彼のことを少しでも想起していただけるようお願いしつつ追悼の筆を措かせていただく。

(当館理事長)

～会館だより～

イタリア語 無料体験レッスン

1月より開講の冬期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

●京都本校：日本イタリア会館

1/7(月)13:00～14:30

1/12(土)11:00～12:30

●四条烏丸：ウイングス京都

1/7(月)19:00～20:30

●大阪梅田校：大阪駅前第4ビル

1/10(木)19:00～20:30

イタリア語 無料カウンセリング

学習経験者向け。事前予約制。

●京都本校：日本イタリア会館

1/12(土)14:00～(各人30分ほど)

スペイン語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

●京都本校：日本イタリア会館

1/8(火)13:00～14:30

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356 / FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: <http://italiakaikan.jp/>